

映画の教室 2019

日本の女性監督—道を拓いた女たち

2019年10月9日(水)、23日(水)、11月6日(水)、20日(水)、12月4日(水)
 全5回、隔週水曜、7:20pm 開始 (研究員による約15分の解説付き)

道を拓いた女性監督たちの作品をみる全5回!

映画芸術や映画保存を学ぶ上で重要な作品を、国立映画アーカイブの所蔵作品の中から上映するプログラム「映画の教室」は、テーマに沿った各5回シリーズ・研究員の解説付きです。シリーズを通して観ることで、より一層映画や作品への理解を深めることができます。

日本に女性監督が登場するのは、欧米に比べて遅い1936年のことでした。1940年代になると記録映画などの分野で女性が演出を手がけるようになり、また、その後、劇映画、アニメーション映画、自主製作映画、ピンク映画などでも女性監督が作品を発表していきます。本企画では、日本の映画監督として道を切り拓いた女性たちの作品を、当館所蔵作品の中から5回にわたり紹介します。各回、研究員による解説付きです。日本の女性監督による多彩な作品を観ることができる本特集を、ぜひともご周知いただきますようお願い申し上げます。

■開催概要

企画名: 映画の教室 2019 日本の女性監督—道を拓いた女たち

日時: 2019年10月9日(水)、23日(水)、11月6日(水)、20日(水)、12月4日(水)

各日 7:20pm 開始 [7:00pm 開場]

定員: 151名 (定員制・全席自由席)

料金: 一般 520円 / 高校・大学生・シニア 310円 / 小・中学生 100円 / 障害者 (付添者は原則1名まで)、国立映画アーカイブのキャンパスメンバーズは無料

前売券 9月18日(水) 10:00amより、チケットぴあにて全上映回の前売券(全席自由席・各70席分)を販売します。

[Pコード: 550-387] 前売料金: 一般 520円 / 高校・大学生・シニア 310円 / 小・中学生 100円

「映画の教室」スタンプカード【観覧券は各回別途必要です】:

第1回目(10月9日)の入場時に、「映画の教室 2019 日本の女性監督—道を拓いた女たち」のスタンプカードを配布し、各上映日に1つつスタンプを押印します。全5回ご覧いただいた方には、2019年度の当館主催上映の入場引換券を1枚謹呈します。

掲載用のお問い合わせ先: ハローダイヤル 03-5777-8600

本企画ウェブサイト: www.nfaj.go.jp/exhibition/filmclassof2019-female

5回のシリーズで映画を学ぶ!



【本企画に関するお問い合わせ】

国立映画アーカイブ 教育・事業展開室 担当: 碓井、土居、富田

電話: 03-3561-0823 FAX: 03-3561-0830 E-mail: pr@nfaj.go.jp

第1回 10月9日(水) 女性監督の登場

1936年に劇映画『初姿』（第一映画）を監督し日本で初めての女性映画監督となった坂根田鶴子に続き、1953年には、「日頃考えていることを全体的に表現してみたい、それにはやはり監督にならなければ駄目だ」と語っていた大女優の田中絹代が『恋文』で監督デビュー。丹羽文雄の原作を木下恵介が脚色、出演者も森雅之、久我美子、宇野重吉、香川京子といった華々しい顔ぶれで、本人も出演している。その後も、田中絹代は女優として活躍しながら1962年の『お吟さま』（にんじんくらぶ）まで、計6作品を監督した。

上映作品

恋文（97分・35mm・白黒）1953（新東宝）（監）田中絹代



『恋文』



『恋文』撮影現場での田中絹代監督

第2回 10月23日(水) 文化・記録映画

戦中には、文化・記録映画の分野で女性が演出を手がけるようになる。プロレタリア映画運動の中で記録映画を監督した厚木たか、1944年に日本映画社に入社し戦後は日映科学映画製作所で数々の科学映画・教育映画を監督する中村麟子などが登場した。戦後は演出分野にも女性が採用されるようになり、岩波映画製作所の時枝俊江や羽田澄子、新理研映画の藤原智子などが監督として活躍した。

上映作品（3作品、計78分）

日本百科映画大系 真空の世界（11分・16mm・白黒）1953（日映科学映画製作所）（監）中村麟子
 絵図に偲ぶ江戸の暮らし 一吉左衛門さんと町の人々（33分・16mm・カラー）1977（岩波映画製作所）（監）時枝俊江
 歌舞伎の立廻り（34分・16mm・カラー）1981（桜映画社）（監）藤原智子



『歌舞伎の立廻り』
©国立劇場・桜映画社

第3回 11月6日(水) アニメーション映画

1950年代から、アニメーションの分野でも女性監督やアニメーターなどが登場する。学研では、神保まつえが監督やプロデューサーとして数々の作品を製作。1980年頃からは、テレビアニメーションでも女性が演出を手がけるようになり、森脇真琴、加瀬充子、ときたひろこなどが活躍する。「赤い鳥のこころ 日本名作童話シリーズ」は、木下忠司と関根光致子のプロダクションK&Sが制作し、木下恵介が監修した、1979年放映のテレビアニメーション・シリーズ。

上映作品（3作品、計56分）

いねむりぼうちゃん（12分・16mm・白黒）1959（がっけんえいが）（監）神保まつえ
 雪の女王 THE SNOW QUEEN（20分・35mm・カラー）1978（学研映画）（監）渡辺和彦
 赤い鳥のこころ 日本名作童話シリーズ 風の母子（24分・16mm・カラー）1979（K&S）（監）森脇真琴 ※第21話



『いねむりぼうちゃん』

第4回 11月20日(水) 子供たちに伝える生命と愛

1980年代になると、自身のプロダクションを立ち上げ自主製作で監督する女性も登場した。槇坪多鶴子は数々の教育映画のスクリプターをつとめた後に、企画制作パオを設立。学校・教育問題に関心を向け、性教育をテーマにした一連の作品を監督。全国の学校・公共施設での上映という形で観客に作品を届けた。実話を基にした『わたしがSuKi』は、援助交際や性暴力、薬物などの問題を、生徒にわかりやすく伝えるために製作された。

上映作品

わたしが SuKi（88分・35mm・カラー）1998（企画制作パオ）（監）槇坪多鶴子



『わたしが SuKi』 ©企画制作パオ

第5回 12月4日(水) 女性たちの生/性

1970年代初頭にピンク映画の監督としてデビューし、これまでに400本を超える作品の監督・プロデューサーをつとめている浜野佐知。1984年に映画製作会社旦々舎を設立、1998年には初の自主映画『第七官界彷徨—尾崎翠を探して』を製作し、当時忘れられていた女性作家・尾崎翠を描いた。その後も老年女性の性愛をテーマにした『百合祭』（2001年）、女性同士の愛を描いた『百合子、ダスヴィダーニヤ』（2011年）、新作『雪子さんの足音』（2019年）など、女性たちの生/性に向き合った作品を発表している。

上映作品

第七官界彷徨—尾崎翠を探して（108分・35mm・カラー・英語字幕付）1998（旦々舎=『第七官界彷徨—尾崎翠を探して』製作委員会）（監）浜野佐知



『第七官界彷徨—尾崎翠を探して』
©旦々舎